

2023 年度日本語教育学会春季大会 一般公開プログラム 開催報告
境界の外側から見える日本語教育学 ―異なる専門分野から見えてくるもの―

主催：公益社団法人日本語教育学会
企画：調査研究推進委員会
助成：一般社団法人尚友倶楽部
日時：2023 年 5 月 27 日（土）10:00-12:00
参加者：441 人



日本語教育学会は、「人をつなぎ、社会をつくる」ことを使命とする学会です。今回のプログラムでは、日本語教育学を専門としない方々を招き、日本語教育学との接点を持つ分野、日本語教育学の外側に位置する分野からの視点や理解を共有していただき、そこから得られる情報や知見を通じて、日本語教育学の本質や意義を浮き彫りにすることをねらい、企画されました。

登壇者は五十音順に、安藤寿康氏（行動遺伝学）、加藤三保子氏（手話言語学）、久保昌弘氏（食育、食文化）の3名でした。まず、3名の登壇者にそれぞれのご専門と日本語教育についてお話しいただきました。その後、「日本語学習者をどのような存在と捉えることが、日本語の学びの成立において重要なのか」「日本語学習者に対してどのような内容を扱うことが、対話力をつけることにつながっていくのか」「文化的背景に基づく日本語学習者および彼らの日本語をどのように見れば、学びが成立する環境が作れるのか」という3つの質問について、ディスカッションを行いました。ディスカッションは司会の倉八順子調査研究推進委員のもとで順調に展開され、視聴者は最大441名にも上り、多くの質問も寄せられました。

開催後のアンケート（回答数93）では、内容についての5段階評価のうち、「大変よかった」が63.4%、「よかった」が29%で、合計で93%近い肯定的な評価が得られました。自由記述部分でも、「3名のパネリストの方々の視点が微妙に異なったけれどもまとまりがあり、大変興味深い内容になった」「日本語教育以外の多角的な視点の必要性に触れられた」というような肯定的な感想、意見が多く集まりました。一方、「伝統や歴史の扱いについての発言にはやや疑問がある」「言語学的知見が生かされていない」等の意見も一部寄せられ、課題があることも感じました。

本プログラムの円滑な実施のために、一般公開プログラム企画運営担当一同は、登壇者との事前の打ち合わせやリハーサルを複数回重ねてきました。当日は機材のトラブルもなく二カ所を配信拠点としながらディスカッションは順調に進みました。また、初めての試みとなる手話通訳者の配置については、圧倒的に賛同の声が多く、高い評価を受けましたので、本プログラムのさらなる可能性を感じさせられました。今回の反省点を踏まえ、今後よりよいプログラムを届けられるように尽力していききたいと思います。

以上